

2017 年金 3: 秋学期講義 現代哲学講義、認識論
講義題目：共有知とは何か？

第 2 回講義 (20171013)

課題 1：共有知をどう定義するか？

課題 2：共有知の成立の条件（必要条件と十分条件）は何か？

課題 3：共有問題への答えとしての共有知

§ 2 Searle の collective intentionality

John Searle

(1932-)

He received all his university degrees, BA, MA, D phil, from Oxford University.

He began teaching at UC Berkeley in 1959.

He is currently Professor Emeritus of the University of California, Berkeley.

1. サールの志向性 (Intentionality) 論

サールは、言語行為についてまず研究し (*Speech Act*)、次にそれを志向性一般の研究へと拡張した (*Intentionality*)。次に、心の哲学の研究に向かった (*The Rediscovery of the Mind*)。その後、個人の志向性の研究を集団的志向性 (collective intentionality, W-intention) の研究へと拡張した (*The Structure of Social Reality*)。

His Books

Speech Acts, 1969

Expression and Meaning 1979

Intentionality 1983,

The Rediscovery of the Mind, 1992,

The Construction of Social Reality 1995

Rationality in Action 2001

Mind, 2004

Making the Social World, 2010

Seeing Things As They Are, 2015

彼は、心の能力、志向性を二種類に分ける。

認知的志向性：知覚、記憶、信念

意欲的志向性：行為内意図、事前意図、欲望

TABLE 2.1 Intentionality

	Cognition			Volition		
	Perception	Memory	Belief	Intention- in-action	Prior intention	Desire
Direction of fit	↓	↓	↓	↑	↑	↑
Direction of causation	↑	↑	N/A	↓	↓	N/A
Causally self-referential?	yes	yes	no	yes	yes	no

(J.R. Searle, *Making the Social World*, 2010, p. 38)

適合の方向 (direction of fit) : ↓は心を世界に合わせることに、↑は世界を心に合わせることに N/A (not applicable) は、適合の方向がないことを意味する。

因果の方向 : ↑は世界が心へ作用すること、↓は心が世界へ作用すること、N/A (not applicable) は、因果の方向がないことを意味する。

Reason for Action (Beliefs, desires, obligations, needs, etc.) → (Gap) Decision → (Gap) Onset of Action → (Gap) Continuation to Completion (p.41)

これらの Gap は→が因果的に不十分であり、そこに決定のための理由 (reason) がはたいていることを示している。

2 集団的志向性

・サールは「人間社会の存在論」の基礎的な建築用ブロックは、人間（と多くの社会的動物）が集団的志向性をもつことだと考える(p.43)。「集団的志向性」とは、「私たちは…している」「私たちは…と信じてる」などの一人称複数形で表現される志向性である。

・J.R. Searle は、*Making the Social World*では、「集団的事前意図」と「集団的行為内意図」を主に取り上げるが、しかし「信念」「欲望」についても、集団的志向性があるという (p. 43)。注目すべきは、サールがここで「知覚」と「記憶」についての集団的志向性の可能性に言及していないことである。彼が集団的知覚や集団的記憶を認めるのか、どうかは、わからない。

・しかし、私たちは歴史的な出来事の共有という意味で、「集団的記憶」をもつだろうし、文化的な知覚（お花見、紅葉狩り、お月見）という意味で「集団的知覚」をもつだろう。

集団的志向性の個人的志向性への還元

(サールによれば、これまでのほとんどの論者は、この立場)

「X と Y が一緒に庭を掃除しようと思図するのは、次の時その時に限る。X は庭掃除の彼のパートを行おうと思図し、Y も、彼のパートを行おうと思図し、各人が他者の意図について相互信念を持っている。」(X and Y intend to clean the yard together if and only if X intends to do his part of cleaning the yard, and Y intends to do his part and each has mutual belief about the other's intentions.)

「意図についての相互知識（共有知）（ないし信念）は、二人の間に出現するのは、各人が意図し、また各人が他者が意図していることを知っており、また各人は、他者がそれを知っていることを知っており、また他者がそれを知っていることを各人が知っていることを各人が知っており、そのように無限につづく」(Mutual (common) knowledge (or belief) about intention occurs

between two people, when each intends, and each knows that the other intends and each knows that the other knows that, and each knows that each knows that other knows that, and so on indefinitely.) (p.46)

個人的志向性への還元への批判

サールは、「すべての志向性は個人の頭脳のなかに存在する」ということを「基礎的事実」(the basic facts) とみなす(p.46)。「基礎的事実」とは、物理学、化学、進化生物学、その他のハードな科学によって与えられる事実である(p.42)。サールは外在的实在論者であり、基礎的事実は、私たちの表象から独立に存在すると考えている (Cf. *The Structure of Social Reality*, Chap. 8)。

しかし、彼によれば、第一に、この基礎的事実は、集団的志向性が個人的志向性に還元可能であることを要求しない。第二に、この還元は失敗する。

サールは、還元への反証として、次の2つのケースを比較する。

Business School Case I

ハーバードビジネススクールでは、アダムスミスの見えざる手の理論を教え、学生はそれを信じるようになる。卒業後、彼らは利己的であることによって人類に利益を与えようとして、世界に出てゆく。かれらは、他の学生もそうしているという相互知識において、これをおこなう。こうして、ここには、各人が持つ目標があり、各人は、他の全ての人が各人がそのゴールを持つことを各人は知っていることを、各人は知っている。

この場合、集団的志向性について還元的説明が当てはまっている。しかし、ここには協力関係はない。むしろ協力すべきではないというイデオロギーがある。つまり、還元的説明では、この事例を集団的志向性の事例ではないとすることができない。

Business School Case II

学生たちが、卒業式の日に集まり、彼らができるだけ利己的に振る舞い、金持ちになることによって、人類に利益をもたらそうと努めようというまじめな約束をする場合である。

この場合には、真の集団的志向性がある。ケース I と II では、外面的な振る舞いは同じであるが、ケース II には、結果に対するより高いレベルでの協力関係がある。このとき、彼らは、約束を守るべき責務を負っており、Peace Corp のような団体の活動に参加することによって、つまり利他的な行為によって人類に利益をもたらそうとすることは、約束違反となる。

サールがこの事例で示したいことは、おそらく次の2つだろう (推測です)。

(1)還元モデルでは、ケース I のように、普通は集団的志向性があると考えない事例も、集団的志向性の事例になる。

他の例でいえば、A と B が別々の車でサンフランシスコに自動車に向かっていているとき、そのことが彼らの相互知識になっているとしても、それだけでは集団的志向性が成立しているとは言えない。サールは、協力関係 (cooperation) が、共有知ないし共有信念を伴うことを認めるが、しかし、共有知や共有信念があるからと言って、協力関係があるとは考えない。(Cf. 49)

(共有知もまた集団的志向性的一种である。ゆえに還元モデルで説明できないのは、協力関係のような特殊な集団的志向性、つまり集団的事前意図や集団的行為内意図である。)

(2)還元モデルでは、約束のような規範性を持つ集団的志向性を説明できない。

ただし約束のような集団的志向性は、集団的志向性のなかの一部分である。サールによれば、集団的志向性は、他の社会的動物にもある(サールは、*The Construction of Social Reality*でも、動物も集団的志向性をもつ p.23 とのべていた)。つまり、言語を持たない動物にも、前言語的形式の集団的志向性がある。

「集団的志向性を持つために、約束する必要はない。約束が行われたり、受け入れられたり、拒否されたりする会話そのものが集団的志向性~~の形式である~~。」「あなたは、言語形式が作られる集団的志向性の前言語的形式を持たなければならない。あなたが、コミットメントを行うためには、会話の集団的志向性を持たなければならない。」 50

つまりサールは、次のような集団的志向性の3段階を考えている。

集団的志向性の前言語的形式 (人と動物)	→	会話の集団的志向性	→	コミットメント
ground-floor 50		human Background		promise

#We-Intentionality による協力関係 Cooperation の説明

事前意図 (この事前意図は私が腕を上げる行為を実行することを惹き起こす)

行為内意図 (この行為内意図は、私の腕が上がることを惹き起こす)

pi(this pi causes a)

ia(this ia causes BM)

(pi = priori intention, ia=intention-in-action, and BM =bodily movement)

#二種類の行為

引き金を引くことによって(by-means-of) 銃を撃つ。

名前を書くことによって(by-way-of) 投票する。

ia B by means of A (this ia causes A, which causes B)

ia B by way of A (this ia causes A, which constitutes B)

#二種類の共同行為

私が車を押し、あなたがクラッチを踏むことによって、二人で車のエンジンをかけようとするでしょう。(車のエンジンをかけるという共同行為を B、車を押すという私の個人的行為を A とすると次のようになる。)

ia collective B by means of singular A (this ia causes: A car moves, causes: B engine starts)

このとき、私は次の信念 (Bel) をもっている。

Bel (my partner in the collective also has intentions-in-action of the form (ia collective B by means of singular A (this ia causes: A clutch releases, causes: B engine starts))). (p.53)

私がピアノを弾いて、あなたがバイオリンを弾いて、デュエットするでしょう。

デュエットをするという共同行為を B、ピアノを弾くという個人的行為を A とすると、次のようになる)

ia collective B by way of singular A (this ia causes: A piano plays, constitutes: B duet is performed)

この時私は、次の信念を持っている。

Bel (my partner in the collective has an intention in action of the form (ia collective B by way of singular A(this ia causes: violin plays, constitutes: B duet is performed)))

サールは、この説明によって、①集团的志向性が、個人的志向性に還元できないことと②集团的志向性が個人の脳の中にあることを示せたと考える(p.60)

<ミニレポート課題>

この説明で、①集团的志向性が、個人的志向性に還元できないことを、証明できているのでしょうか。